春秋中期の政治史（鄭を回る晋楚の戦）及び春秋公羊傳・穀梁傳通釋

岩　間　秀　幸
瀧　本　可　紀

本篇の構成

第一部は春秋時代の政治史であり，第二部は春秋公羊・穀梁傳の通釈で，前者は後者を理解する為のものである．春秋史は従来，殆ど春秋左氏傳及び史記に基づいて書かれたものである．公羊・穀梁の二傳は春秋経文に含まれる褒貶の義を解明したものであり，左傳と比較して史実の記述が少ない．しかし，この二傳にも相当程度の歴史的記述があり，左傳とは異なった立場で書かれている．本篇は左傳以外の二傳及び国語をできる限り取り入れて書かれたものである．左傳に関しては，通釈が数多く存在し容易に入手できる．それに反し，公羊・穀梁の二傳の通釈は殆ど存在していない．それ故，第二部として二傳の通釈を載せる次第である．

Abstract

During the years 573B. C. - 558B. C. very radical social developments took place in Jin（晋）, mainly owing to the efforts of Xun Ying（荀罃）. It was the time from Yanling war to the death of Duke Dao of Jin.

At that time, Jin（晋）and Chu（楚）struggled with each other to control Zheng（鄭）. Chu wanted to expand toward the North, Huanghe Valley（黄河流域）. For that purpose Chu had to keep Zheng under its control and go through Zheng at any cost. On the contrary, Jin should check Chu's advance by all means.

Thus, several severe battles broke out on the Honan plain（河南平原）. Xun Ying constructed the advanced base, Hulao（虎牢）fortress. He succeeded in preventing the advance of Chu strong Army. Zheng was suffering from hard battles between two big powers. After all, Jin defeated Chu and lowered international prestige of Chu. In addition to that, Chu encoutered the resistance of Wu（呉）. The outlook for Chu's future was becoming worse and worse.

鄭を回る晋楚の戦

鄢陵の戦（前 575）に勝利し，それを契機に晋の厲公は国君の権力を増大させようとした．彼は晋の大世族郤氏を壊滅させ一時的には成功したが，すぐ他の世族，即ち世々続いた卿族，欒書と荀偃に殺されてしまった．この政変を主導した欒書は直ちに荀罃・士魴を周の都，洛邑に送り，晋の文公の子孫である悼公を迎えた．この二人は有能で，特に荀罃は数年後には晋国の行政官のトップをも兼ねる中軍の将になる程の，極めて有能且つ見聞の広い人物であった．即位した悼公はわずか 14 歳と言われ，彼も有能であった．

周の都洛邑から晋の都新田までの長い旅路で，途中三人は晋国内外の事など色々話し合ったであろう．特に楚との関係には関心が向けられたはずである．荀罃は楚にいたことがあった．それも前 597 年晋楚の邲の戦で楚の捕虜になってから 10 年間であった．その後，晋の悼公の最有力の卿として晋を支えた．晋楚の鄭争奪戦では鄭を晋側に引き入れた最大の功労者であった．そこで，ここでは荀罃を主要なテーマにする．

Ⅰ　荀氏の成立

荀罃が登場するまで荀氏はどのような経過を辿って来たのか，歴史的背景と共に述べていく．

荀氏が晋国の歴史に登場するのは晋の献公の時である．献公の側臣であった荀息は晋の南にある虢と虞を晋が手に入れることに，大いに功があった．又献公の亡き後，彼の遺嘱を受けて太子奚斉と公子卓を立てようとした．しかし二人は共に殺され，荀息自身も二人に殉じた．

文公重耳の時，彼が城濮の戦を前にして軍を編成した際の文公の乗る兵車の御者が荀林父である．三行が創設されると中行の将となり，令狐の戦では上軍の佐（副），次の河曲の戦では中軍の将趙盾の佐であった．これは晋の軍事，行政の No. 2 である．荀林父のキャリアのスタートは国君の兵車の御者であるが，これは重大なポストである．当時は国君が直接戦場に出ることは少なくない故，国君の兵車に陪乗するのは極めて重大な職務で，車右である魏犨と共に二人の位は卿に次ぐものである．城濮の戦の後，晋文公重耳は三軍（戦車部隊）以外に，山地にいる狄に備えるため「三行」即ち歩兵部隊を作った．徒兵という．東京上野の隣の駅‘御徒町’の徒はこの類いである．三行は中行，右行，左行で，中行の将に荀林父が任命された．尚，春秋中期より官職名を氏とする事が行われるようになり，荀氏は中行氏と称することが多くなる．

河曲の戦の翌年（前 614）左伝文公 13 年「晋人患秦之用士会也」晋人，秦の士会を用うるを患う．「夏　六卿相見于諸浮」夏，六卿諸浮に相見ゆ．諸浮は晋の地で晋の都城の外にある．夏，6 人の卿（大臣）が諸浮で会合を開き今後の対策を相談した．趙宣子曰“「随会在秦，賈季在狄，難日至矣」随会秦に在り，賈季狄に在り，難日に至る．”随会は士会のことで，随に封地があるため随会という．趙盾は

言う．“士会は秦に在り狐射姑は狄に在る．困難な事が日々やって来る．「若之何」之を如何せん．どうしたら良いだろう．”中行桓子（荀林父）が言った．“「請復賈季」請う賈季を復せん．狐射姑を戻しましょう．「能外事，且由旧勲」彼は外交交渉に長けていますし，又父親狐偃の手柄の事もあります．”それを聞いた郤缺は“「賈季乱，且罪大不如随会」狐射姑は公子楽を呼んで即位させるという乱暴な企てをしたり，陽処父を殺すという大罪を犯しています．どちらかと言えば士会の方が良いでしょう．彼は身分が低いとは言え，十分恥辱を弁えています．性格は柔和ですが，他に唆されて不義を働くことは無いでしょう．”魏寿余に命じて士会を秦から連れ戻すことになり，それは成功した．士会は晋に帰国し，歓迎され，彼自身も晋に多大な貢献をした．

士会は帰国したが，秦にはまだ残った彼の一族が居た．彼等は士ではなく劉の氏を称するようになった．左伝はこの話で締め括られている．この事は，漢代において卑賤の身である漢の高祖劉邦を高めるために利用されている．沛から出た高祖は士会の一族で，その先祖は堯であると称した．だが，これは特に珍しい事ではなく，我国にも同じような例がある．低い家柄出身である豊臣，徳川の両家は源，平の出身だと称している．

河曲の戦の２年後，楚の荘王が即位した．彼は春秋時代の覇者，斉桓，晋文と並ぶ楚の覇王である．楚は長い間中原諸国から荊蠻（けいばん）と貶められていた漢水流域の国家であった．楚は前639年に初めて国都を郢（えい）に建て，付近の小国を次々と兼併した．中原に於いては中規模な国が並列しており，中原諸国が楚と同様に領土拡張を目指しても実現することは困難である．それに反し，中原から離れた晋楚斉秦の４つの国は，周囲が小国であるか，或は東夷，南蠻，西戎，北狄など少数民族の地域であるため容易に国土拡張ができ，強大な国家となって戦国時代に入ることができた．

楚の荘王（前613－前591）の時期，晋国は中衰の時期に当り，楚国は北上して覇業を成し遂げるのに有利であった．荘王は北上して周の京師洛陽の付近まで達した．その帰国途上，有力な若敖（ごう）氏の反乱に会い，辛うじてそれを鎮圧した．帰国後，国内を整備し，南方を平定した後，再度北上した．楚は中原で覇者になろうとしたが，第一の関門は鄭であった．楚王は鄭を３ヶ月囲み，最終的に鄭は楚に投降した．鄭は元来晋の盟国であったので，晋は兵を派遣して鄭を救おうとした．しかし，時すでに遅く，鄭は楚に降伏していた．

Ⅱ　邲の戦（前598）と荀首

鄭が楚に投降したことを知り，中軍の将荀林父と上軍の将士会は晋に帰国しようとしたが，先穀は飽くまで楚に対し戦を挑もうとし，勝手に手勢を率いて黄河を渡り出撃した．一方楚王も令尹孫叔敖も陳や鄭との相次ぐ戦で，兵士には休息が必要だと軍を帰国させようとしていた．しかし，荘王の側臣伍参が荘王に戦いを続けることを進言した．晋の総師荀林父の指導力の無さ，晋軍の統制が乱れている事をその理由に挙げた．楚軍の必勝を力説し，楚王は受け入れた．かくて晋楚の戦が始まり，晋の大敗に終った．

この戦で，左伝宣公 12 年（前 598）「楚熊負羈囚知罃」楚の熊負羈知罃を囚う．知罃は荀罃の事．知は荀罃一家の領地で，領地の名を氏にしている．「知壮子以其族反之」知壮子其族を以て之を返す．知壮子は知罃の父，知首で荀林父の末弟．知首は荀罃が居ないのに気付き，自分の手勢を引き連れ戦場へ引き返した．「下軍之士多従之」下軍の士多く之に従う．魏錡が御者であった．当時の国軍はその指揮官に戴く貴族の族軍を加えて編成されていた．知首は下軍の大夫職であり，部下の信頼が厚かった．下軍の兵士の多くがこの捜索に協力した．

荀首は良き矢を魏錡の背負っている箙に納めた．魏錡は怒って言った．“貴方は自分の子を救い出そうとするのではなく，矢ばかり大切にする．董澤産の矢だって国へ帰ればいくらだってあります．”知首が答えた．“然るべき人の子を捉えてそれと荀罃とを交換するのでなければ，彼を取り戻すことはできない．私が良い矢を乱射するような事をしなかったのはこのためだ．”知首は連尹襄老を射殺し，その屍を車に乗せ，公子穀臣を射て捉え，この二者を車に乗せて帰った．

戦すんで晋国に帰った荀林父は敗戦の責を負うことになる．「秋　晋師帰，桓子請死，晋侯欲許之」秋，晋軍は帰国し，総帥荀林父は死を請う．晋侯之を許さんと欲す．だが臣下の進言で荀林父の命は助かり，彼の地位はしばらく保全された．

左伝は荀罃を連れ戻す話の前に，晋の兵士達が邲の戦に敗れて晋へ逃げ帰る際の一つのエピソードを記している．晋の趙旃が自分の使っていた良馬 2 頭を兄と叔父に譲って，彼等を危険から逃れさせた．自分は他の馬で逃走しようとしたが，その馬では敵に遇って逃げ切れない．兵車を棄てて林の中に駆け込んだ．丁度そこへ知り合いの晋の逢大夫が二人の子供を乗せて通りかかった．逢大夫は二人の子供に言った．“「謂其二子無顧」其の二子に謂う．顧こと無かれ．振り向いては駄目．”だが子供達は振り向いて言った．“「趙傁在后」趙旃おじいさんが後に居るよ．”父親は気が付かない振りをして行き過ぎようとしていたが，子供達はそれとも知らず父親に趙旃の存在を知らせる．無論，子供の甲高い声は趙旃にも聞こえている．万事休す．趙旃を乗せると，身分の違う子供達を兵車から降ろさざるを得ない．路辺の木を指して言った．“お前達の屍をここで拾ってやろう．”そう言うと，車上から綱を降ろして趙旃を登らせ脱出した．翌日逢大夫は目印に従って子供達の屍を探したが，「皆重獲在木下」皆重なりて木の下に獲さる．

楚は邲の戦で勝利し，続いて宋国を 9 ヶ月も包囲し遂に屈服させた．晋は救援を求めた宋の要請を受け入れなかった．それ故，覇者は楚の荘王になり，晋の威信は凋落した．確かに晋は邲の戦で敗れはしたが，晋の本拠地は山西省南部であり，河南省鄭州市付近である戦場邲は離れて遠き地である．それ故，本国は何の損害も受けていない．

邲の戦の後，執政はしばらくは荀林父で，その後士会に移り（前 593），続いて断道の盟会が行われ，郤克が執政となっている．その間，荀氏の中で荀林父の子供，荀庚が下卿になっている．だが荀氏は全般的に影が薄いことは否めない．

斉が衛と魯を攻めた．そこで両国は晋に助けを求め，晋の国君はそれを認めた．前 589 年，晋と斉との間で鞌の戦が始まった．その結果，晋は斉に大勝した．かくて晋は又勢力を盛り返した．欒書は中軍

の将となり，荀首が中軍の左となる．

晋は楚に次の様な申し出をした．晋は楚の公子穀臣と連尹襄老の屍を楚に戻し，それと交換に知罃を晋に帰して欲しいという内容であった．当時，知罃の父荀首は中軍の佐という高官であったので，魯左伝成公３年「故楚人許之」楚は之を許した．楚では荘王が死に，共王が即位してまだ３年目だったので協力且友好的な姿勢を示したのであろう．知罃は智罃とも言われる．知と智は発音が似ており，古代人はそれ程こだわることなく文字を用いている．楚の共王の共は共（とも）にの意であるが，共と恭は発音が似ているので恭の意味で共を使っている．「王送智罃曰」王は智罃を見送って言った．“「子其怨我乎？」子（あなた）は其れ我を怨か”智罃は答えて言った．“晋楚二国交戦し，臣不才，其の任に勝（かた）えず，以て俘虜となる．この度楚の国王が私を帰国させて下さった事は「君之恵也」「誰敢怨」誰をか敢て怨まんや．”“それなら貴方は私に感謝しているのか．「然即徳我乎」然らば即ち我を徳とするか．”智罃答える．“晋楚は各々自国のことを考え，自国民の生活を安らかにすることを求め，各々の怒りを抑え，お互いに話し合うことにしたのです．そして両国とも捕虜を釈放して友好関係を実現したのです．私はこの二国の友好に何等参与していません．又敢て誰に恩義を感じましょう．”共王は更に言う．“「子帰何以報我」子帰りて何を以て我に報ず．何を以てお礼をするのか．”智罃答える．“私には怨みも恩義も無く，感謝する事なぞ有りません．”共王言う．“たとえそうだとしても，ぜひ自分の考えを私に告げなさい．”荀罃はそれまで当り障りの無い返事をしていたが，それならばとここできっぱり自分の考えを述べる．“君の霊を以て（楚王のお蔭での意）捕われの臣私が自分の骨を晋に帰すことを得て，我が晋の君がもし私を死刑にしたなら，その死は不朽なものになる．もし君の恩恵で死を免れ，私を君の臣荀首に下賜され，荀首が君に願い宗廟で私を殺したなら，それも又不朽です．もし君が私を殺さず，父の職を嗣ぐようにとの命が下るなら，次第に国事に参与するようになります．一部の軍を率いて国境を守ることとなり，楚王の軍に遇うと雖も決して避けません．全力を挙げて忠節を尽して戦います．これが君に対する返礼です．”楚王はこの様な臣下のいる晋は争って容易に勝てる相手ではないという感を深めたであろう．鄭重にもてなして荀罃を返した．

これは晋の公子重耳が亡命の途上，楚に立ち寄った時の状況に似ている．左伝僖公23年「公子重耳及楚，楚子饗之曰」公子重耳が楚に到着すると，楚の成王は宴を催し重耳をもてなして言った．“公子，若し晋国に反（かえ）らば，則ち何を以て不穀（王の自称，私）に報いん．国に帰って国君となったら，どんなお返しをして下さるか．”重耳は返礼を求められた時，楚王は何でも充分所持している故返礼できるものは何も無い，と言った．それでも何か有るだろうと楚王にしつこく言われ，重耳は答えた．“「晋楚交戦して中原で遇う事態になったら「其避君三舎」其れ君を避けること三舎．”一舎は軍の一日の行程30里（１里は約500米）三舎を避けるとは軍の三日分の行程を避けることを言う．荀罃が帰国する時の晋は大国になっているのに反し，重耳が帰国しようとする時，晋は乱れていた．だが自国の状況にかかわらず荀罃も重耳も堂々と楚王と対峙している．

荀罃が晋に戻るに際し次の様な経緯があった．帰還の前年，成公２年，連尹襄老の屍体と楚の公子穀臣と，荀罃との交換が楚王の周囲ですでに話題になっていた．それは先王，荘王の側臣であった申公巫

臣の策略とも言える．荀罃の父荀首の子供に対する愛が深いことは勿論であるが，それだけでは帰還を実現させるのは困難である．楚が陳国を討った時，荘王は陳の大夫夏徵舒の母である夏姫を妾にしようとしたが，巫臣にそれは色を貪る事だと反対された．公子，子反が彼女を娶ろうとしたが，それは必ず死を招くことになる，夫，夏姫と通じた陳公，夏姫の子と同じように死ぬ羽目になると反対した．そこで荘王は夏姫を連尹襄老に与えた．巫臣はこれに反対する適当な理由を見出せず反対しなかった．邲の戦で連尹襄老は射殺された．夏姫は鄭穆公の公女（娘）である．巫臣は鄭に話をつけて夏姫を鄭に呼び寄せるように仕向けた．鄭から知らせが来た．襄老の死体は手に入る．「必来逆之」逆は迎えるの意．必ず来たりて之を迎えよ．「姫以告王」姫以て王に告ぐ．姫は姫君の姫ではなく，周の姓である姫姓の出身であることを示している．男性は春秋期より姓よりもむしろ氏を用いるようになったが，女性は飽く迄姓を使っている．鄭国は周王朝と血縁を同じくして分れたので姫姓であるが，斉は太公望の国で姫姓ではない．秦や楚は無論異姓の国である．女性が姓にこだわるのは，左伝僖公 23 年「男女同姓　其生不蕃」男女同性ならば其の生蕃（しげ）らず．「同姓不婚　悪不殖也」（国語晋語四）同姓不婚は子孫が増えないことをにくむからである．夏姫は鄭からの知らせを王に告げた．荘王は巫臣にこれをどう思うか問うた．巫臣答えて曰く．“恐らく本当の事でしょう．「知罃之父　成公之嬖（へい）（寵臣）也」而（しこうして）中行伯（荀林父, 即ち中行林父）の季弟（末弟）也．「新佐中軍」新たに中軍に佐たり．最近中軍の副司令官になった．その上，鄭の皇戌（じゅつ）とも親しい．「甚愛此子」此の子（荀罃）をとても愛している．必ずや鄭を通じて公子と襄老の屍体を楚に帰し，その代りに智罃を帰して欲しいと言ってくるに違いない．鄭は邲の戦で楚側に付いたことで晋に恐れを抱いており，「欲求媚於晋」媚を晋に求めんと欲す．鄭は晋に阿（おもね）ようとしている．「其必許之」其れ必ず之を許さん．”巫臣の話を聞いて楚の荘王は彼女を鄭に帰した．彼女は出発時，見送り人に“屍を得なければ吾返らず”と言って出発した．巫臣は鄭国に夏姫を妻にしたいと請い，鄭伯はそれを許した．その間に荘王は亡くなり楚の共王が即位した．晋と斉との鞌の戦いは終り，斉は敗北した．楚は荘王の死の時に当り，斉を全く援助できなかった．楚は晋に名を為さしめた事を残念に思い，全軍を挙げて魯国に進出をはかった．そこで共王は斉に出兵の時期を知らせるため，巫臣を斉に派遣した．最初，巫臣は夏姫を連れて斉に行くつもりであったが，斉が負けたと知り，戦に負けるような国には行きたくないと晋国へ奔り，郤至の所に身を寄せた．晋は彼を邢の地の代官にした．令尹の子反は共王に, 晋国に多くの贈物を送って巫臣の任官を阻止するよう進言した. これに対し共王は「止」止（や）めよの一言．“巫臣が自分の為にやった事は間違っているが，先君荘王の為に謀った数々の事は忠誠心そのものである．忠誠心こそ国の固めである．彼が国に尽した事と今回の事を比べると，彼の功績の方がはるかに大きい．「所蓋多矣」カバーする所が多い．その上，もし彼が晋に役立つなら，たとえ我々が厚礼を用いようとも，晋国は同意するだろうか．もし国に益なければ晋は彼を捨てるだろう．「何勞錮焉」何ぞ錮するを労せん．何も我々がわざわざ錮する（任官を阻止する）事を申し出る必要はない．”今回は令尹子反は引下がったが，これで終ったわけではなかった．その後，子反と子重は申公巫臣の一族を皆殺しにし，二人でその財産を山分けした．そこで巫臣は怒り，晋公に自分を呉に派遣する様要請した．それによって晋と呉の国交を強化し，新しい戦術を呉に教え，自分の子供を呉に残し外交官とし

て晋との交渉に当らせた．かくて対楚第二戦線が結成され，これが楚に対して大きな脅威となった．

左伝に，楚に捕えられた荀罃を脱出させるために，一つの作戦が実行されようとしたことが記されている．ある鄭国の商人が荀罃を衣装袋の中に隠して楚国から連れ出そうとした．計画が実行される前に楚の共王が彼を送り出していた．その後，商人は晋へ行って商売をしていて荀罃に遭遇した．荀罃はその商人が実際に脱出させてくれたかの如く，彼に充分なもてなしをした．商人言う．“「吾無其功」吾其れ功無し．貴方が帰国することに私は何の功績も有りません．私は地位の低いつまらない人間ですが，実際には助けもしないのに，助けたかの如く歓待を受けるなど，君子を騙しているようなものでその様なことは出来ません．”彼はそう言ってさっさと斉国へ行ってしまった．山西省南部から斉の臨淄までは東京，広島間の距離に近い．当時の有力な鄭の商人の行動範囲が伺われる．荀罃が捕えられて10年が経ち，荀首も一か八かやってみようという気になったのかも知れない．恐らくこの商人は荀首に頼まれ，危険な作戦に一役買って出たのであろう．幸いにもそれを実行する直前に捕虜交換の交渉が成立した．君子にとっては人を救うという誠意が重要であるが，一方商人はプラグマティストで，成果が無ければ，即ち何等役に立つ物が無ければ，それまでの行為は無意味だという観点に立っている．或る意味で小気味の良い人物である．

鄭国は交通の十字路であり，商業が盛んな地方であった．有力な大商人となると国君と繋りを持っていることを伺わせる例がある．晋の文公重耳の次の襄公の時，秦が鄭を襲撃しようとした．その時秦軍の主将孟明視が鄭の商人弦高に出会った．商人は秦軍が鄭国を密かに襲撃しようとしていることを知り，祖国が危急存亡の時にあると思った．窮余の一策として，自分の持っている4張の上等の皮革と12頭の肥えた牛を主将孟明視に献上して言った．“我が国君は貴方が大軍を率いて我が鄭に来るのを知り，特に私を派遣してこの細やかな礼物を差し上げ，皆様を慰労したいと思っています．”一方，急いで鄭国にこの事を知らせた．孟明視達は鄭国が秦軍の行動を既に知っていると勘違いした．鄭国は既に防備を堅めていて奇襲作戦は不可能だと判断し，帰国に向かった．だがその途上晋の攻撃に遇い，孟明視等は捕虜になった．鄭国の商人の意気と機智が良く表われた話である．

Ⅲ　荀罃の活躍

1　趙武の冠礼

国語晋語六に「趙文子冠」という文がある．趙文子とは趙武のことで，趙盾の孫，趙朔の子である．彼は前583年趙一族の族滅の際韓厥の陰徳の御蔭でかろうじて生き残り，趙家を継ぐことが出来た．冠は冠礼を行うこと．古代男子が成年に達すると行う礼で，卿大夫を訪問することになっている．この時は欒書，荀庚，范燮（はんしょう），郤錡，韓厥，智罃，郤犨（しゅう），郤至である．

荀罃は趙武に言った．“「吾子勉之，成宣之后，而老為大夫，非耻乎」吾子之に勉めよ．成宣之后であり，老いては大夫なりせば　耻に非や．吾子はあなたの意．成は趙成子趙衰，曽祖父，宣は趙宣子趙盾，祖父．あなたは良く努力しなさい．趙衰や趙盾の後代であっても，老いて卿になれず大夫のままであっ

ても恥ではないでしょう．成子の文才，宣子の忠心は忘れ去ることは出来ません．趙衰は先代の典籍に基づき，文公を輔佐し法令に通じ，最終的には執政となりました．趙盾は心を尽して霊公を諫めたが，強諫すればする程霊公に恨まれ，それでも死を冒してまで諫めた．これを忠と言わずして何と言えましょう．趙盾の忠心を持ち，それに加うるに趙衰の文才を持って国君に仕えれば，必ずや成功は間違い無いでしょう．”

荀罃に会いにやって来た青年趙武は，かつて邲の戦で捕虜になり楚に連れ去られた時のことを荀罃に思い起こさせたであろう．前途に何の希望も無く，ただ日々が過ぎるのを待つだけであった．そうした心境から，今大夫であるが其のまま卿に成れなくてもいいではないか，と言ってはみたものの，やはり輝かしい先祖，趙衰，趙盾を引き合いに出し，青年に頑張ってくれと激励したのであろう．この冠の礼は鄢陵の戦の直前のことである．

鄢陵の戦（前 525）では荀罃は下軍の佐と居守になっている．この戦の軍の編成は次の様になっている．

中軍　将―欒書　　佐―士燮　　居守―荀罃
上軍　将―郤錡　　佐―荀偃
下軍　将―韓厥　　佐―荀罃
新軍　将―郤犨　　佐―郤至

居守は戦の間城を守る役目で，荀罃は居守と下軍の佐を謙任し，郤犨は新軍の将であったが，衛斉へ乞師（求兵）に行き，欒黶（えん）が魯へ求兵に行っている．

2　悼公の出現

鄢陵の戦の後，この戦に反対した士燮は戦後すぐ死亡した．続いて三郤が厲公達に殺され，厲公や胥童も欒書と荀偃に殺された．欒書は荀罃に命じて周から悼公を呼び寄せ即位させるとすぐ死亡した．結局，わずか 3 年前後で 8 人の卿のうち，欒書，士燮，郤錡，郤犨，郤至の 5 人が死に，残ったのは荀偃，荀罃，韓厥の 3 人である．

鄢陵の戦で楚国は破れ，これより守勢に立つようになり，加えて晋と呉の連繋が強化された．楚国は二正面作戦に携わざるを得ず，時が経つにつれ状況は益々困難なものになって行った．

悼公は欒書の亡き後，韓厥を中軍の将にし，彼は執政となった．又，悼公はそれまでの卿である欒，荀，士，韓の 4 氏に加えて，かつて文公重耳の側臣であった趙，魏を復活させた．特に魏絳は悼公の側臣として重宝がられ，重要視された．趙武は次の国君平公の時に大いに頭角を表わすことになる．

楚は晋が混乱を極めた状態になったのを見て，現在の徐州，当時の彭城を宋から奪った．晋としてはそれを見過すわけには行かない．悼公直直出馬し，晋軍は彭城へと人馬は進み，楚軍は戦わずして撤退した．その後，晋楚の主力軍が激突する戦は無くなったが，小競り合は続いた．特に鄭を晋楚のどちらが取り込むかが問題であった．

晋は彭城を占拠した後（前 572），すぐに楚と結んでいた鄭を攻撃した．一方，楚と鄭はそれに対抗して宋を攻撃した．鄭伯成公はこれより約 10 年前（前 582）晋に行った時，楚と通じていることを理

由に晋に捕えられた．鄭側は国君が捕えられた事を大して問題視せず，代りを立てれば良いという姿勢をとった．これを見た欒書は「我執一人焉，何益」我一人を執うるも，何の益あらん．成公一人捕えても仕方がない．むしろ鄭を伐って君を鄭に帰し，和睦を求める方が良いと言った．そこで鄭と晋は盟し，執政の子駟が人質となり鄭伯は帰国した．それ以来鄭成公は死ぬまで，晋ではなく楚側に付いていた．成公が死ぬ前，卿の子駟は成公に，晋の側に付いて少し国を楽にしたいと願い出た．しかし，成公は“楚の共王は鄭を守る為に目に矢を受けられた．楚と離れたら，我が鄭と親しくなる国はどこにもない．そうならない様にできるのは諸君達だけだ”と言って死んだ．子罕（かん）が国に当り，子駟は政を為し，子国は司馬となり国政を執行した．

晋の軍が鄭を攻めて来た．「諸大夫欲従晋」諸大夫晋に従わんと欲す．子駟曰「官命未改」官命未だ改まらず．先君の命令はまだ改まっていない，と言って引き続き楚側に付くことにした．荀罃の行動について左伝襄公元年の経文に次の様にある．「晋侯使荀罃来聘」晋侯荀罃をして来聘せしむ．晋侯は魯国襄公の即位に際し荀罃を使節として派遣した．荀罃は晋を代表する人物になり始めている．悼公は即位して２年目であり，又即位の経緯から見て，出来るだけ早く中原諸侯国と安定した関係を築きたいのは当然である．それを実現させるに最適な人物として荀罃が指命された．

３　虎牢の築城

晋はいつまでも自分に抵抗する鄭をこれ以上許しておくわけにはいかない．どう対応するかを話し合う会が戚（せき）で開かれた．その時魯の孟献子が提案した．“「請城虎牢以偪鄭」請う，虎牢に城（きず）きて以て鄭に偪（せ）まらん．城は城壁を築くの意．虎牢の地に城壁を築き鄭に圧力をかけましょう．”荀罃は即座に「善」それは素晴しいと答えた．彼は続けて“この会に斉の崔杼（ちょ）も滕（とう），薛（せつ），小邾（しゅう）も出席していないのは全て斉の所為だ．我が晋侯の心配は鄭だけではない．この次の会に斉が来ないなら，斉と一戦交えねばなるまい．”と公言した．無論これは晋側に入りこんでいる斉の間諜を通じて斉に知らせる為である．「事将在斉」事は将に斉に在り．事は戦争のことで，斉に戦いを挑むという意．日本でも‘有事の際’と用いている．

同年の冬，戚の地で再び会が開かれた．今回は斉の崔杼も他の三小国の大夫も参会した．これは「知武子言故也，遂城虎牢，鄭人乃成」知武子（荀罃）の威しの言葉を聞いた所為である．そこで諸侯は協力して虎牢に城壁を築くことになった．荀罃はこれが良いとなると，実に素早く対処する才をここで見せつけた．鄭国はその状況を見てすぐに講和を求めてきた．因に，虎牢は洛陽の東で，現在の鄭州市に近く黄河に近い．現在汜（し）水と言われている．関羽が兄者の玄徳に会うために，曹操と分れて旅を急ぎ通った場所，汜水関が虎牢である．

楚は彭城からは撤退したが，一方呉に戦を挑み大敗した．それを指揮した令尹子重は敗戦を非難され，ストレスで死亡した．左伝襄公４年，晋は魏絳の策を用いて戎と和解を成立させ，西北方面の警備が緩和された．それによって東方及び南方の楚へ全力を注ぐことが出来るようになった．

左伝襄公４年「許の霊公が楚に仕えて晋の主催した盟会に来なかったため，その冬晋の知武子が師を

率いて許を伐つ」とある．楚は自国の傍の小国を次々と占拠し自国化してきたが，いよいよ中原諸国に手を伸し始めた．許は楚と接した国で，少し特異な事情を有していた．秦山を祭るために鄭が持っている魯に近い祊田と，魯公が洛陽の周王に朝するための鄭に近い許田を交換する話を鄭が魯に持ちかけ，この年に成立した．許は現在の許昌で曹操の居城でもあった．この交換は等価交換ではなかった様である．許の土地の方が祊よりはるかに大きかったのであろう．鄭は璧を魯に贈っている．実は許は許国で太岳の子孫と伝えられている．それまで魯は許国を自分の附庸国（属国）と考えていたが，許国はそうは思っていなかった．それ故許は鄭の思い通りになるまいと思ったが，許は所詮小国で，鄭に対抗するためには近傍の楚に頼らざるを得ない．許と鄭のいざこざは絶えることがなかった．

これ以降，晋と楚の間で陳をめぐって戦が続くことになる．襄公3年，陳侯は袁僑を盟会に送って晋との和睦を申し込ませた．晋侯はこの事を諸侯に告げ，陳の袁僑は魯の叔孫豹及び諸侯の大夫と和睦を盟った．するとすぐ楚の司馬公子何忌は陳を侵した．これは陳が叛いた故である．襄公5年，楚の令尹子辛は処刑されて子囊が令尹になった．子辛が陳に対し余りにも多くの物を私的に要求したことが陳の離反の理由だと解ったからである．

斉は成立時は山東半島の西半分であり，東半分は東夷の国，萊であった．襄公6年，斉は萊を滅して斉の国土は倍になった．現在青島から高速道路を東北に向かい煙台まで約200km，その間山は全く見えず広大な農地が広がっている．現地の人の話では野菜の栽培でカリフォルニアと競っているとの事である．然し，中国全体からすると山東半島はちっぽけな地方にすぎないが，そこに立つと中国の広大さが良く解る．帝国陸軍が‘点と線’でしか制圧できなかったと嘆いたのもむべなるかな．この作戦を成功させたのは晏嬰の父，晏弱である．晋の厲公が殺されたと同じ時に斉の国都で殺された国佐の側近で，萊に逃げ，そこで軍の指揮者となり斉に抵抗した王湫は殺された．

晋では襄公7年，遂に韓厥が辞し，荀罃が中軍の将に就いた．楚は相変わらず令尹子囊が陳を包囲している．陳は晋にいる陳侯を呼び戻すために策略を講じた．陳人が陳の公子黄を楚に送り，彼を捕えるよう頼んだ．そして陳侯に“楚の人が公子黄を捕えた．君がもし帰国されないなら，国が無くなるのが忍びず，公子黄を新たな国君にするかも知れません．”と言った．それを聞いて陳侯は盟会から逃げ帰って来た．

鄭では鄭伯僖公が子駟に殺され，それに抵抗し子駟を殺そうと計画した公子達は逆に子駟に殺された．そして5才の簡公が即位した．勢に乗った鄭の子国，子耳は蔡に侵入し公子燮を捕えた．鄭人は久々の勝利に大いに沸いた．5月に刑丘で晋の会が開かれ，諸侯の大夫が集まったが，鄭伯自身が参会して蔡の公子を晋に差し出した．

無論楚はこのような鄭の行動を見過ごすわけはなく，その年の冬，鄭が蔡を伐ったことを理由に，楚の子囊が鄭を伐った．それにどう対処するかをめぐって，鄭内は二派に分れた．一方は楚に帰順することを，他方は晋が助けに来るのを待つことを主張した．執政の子駟は結論を引き伸すわけにはいかない．楚の大軍が城下に迫っているからである．結局，鄭は楚に帰順することにした．晋が来たならば，そこで晋に従えばよい．それでこそ民を救うことが出来る．そこで鄭伯は晋に使者を送り，次の様な内容を

伝えた．“蔡を攻め，公子を晋に献上したことを理由に楚に攻められ，我が民は皆苦しみに耐えかねています．それ故楚に盟しました．その間の事情を報告致します．”これに対し知罃は次の様に応じた．“鄭の君は楚が鄭を伐つとの命を知ったにもかかわらず，一人の使者も我が晋の君に送って来ず，すぐに楚国に屈服した．楚に屈服しようとする君主の願いを誰が反対できましょうか．我が晋の君は諸侯の軍を率いて城下に見参するつもりです．どうぞ良くお考え下さい．”

襄公９年，秦の景公が楚に使者を送って楚に援軍を要請し（乞師），晋を伐とうとした．楚王は之を許した．この様に君主が直接判断を下すことは華夏族の国，即ち中原諸国では有り得ないことになっている．君主は聴政で，卿達が進言する政策を聴き，それに諾否を下すのである．そうすれば政策が失敗しても国君の責任が軽くなるのは無論である．それは又，国君に対して貴族達の権力が大きくなっていることをも意味している．それに反して楚では君権が重く，貴族達の権力は軽い．特に荘王が最大の世族，若敖（ごう）氏を滅ぼして以来一層その傾向が見られる．令尹子囊は荘王に反対した．“「不可，当今　吾不能與晋爭」不可，当今　吾晋と爭ふ事能はず．駄目です．目下，我々は晋と争うことは出来ません．晋公は才を見抜いて人を用い，すべてその職に適した人物を選んでいます．卿大夫，士，庶人，その他の民も皆その本分を尽しています．韓厥が退いた後，荀罃が彼の方法を継承して政治を行っています．あの功労の多い魏絳も趙武を賢能だと言って，彼の輔佐役になり，趙武が新軍の将，魏絳が佐になっています．この様な晋を相手に戦うことは出来ません．精精晋国に仕えるぐらいのものです．「君其圖之」君其れ之を圖（はか）れ．君よくよくお考え下さい．”王は答えた．“私は既に許可してしまった．たとえ我国が晋に及ばないとしても，必ずや出兵しよう．”秋，楚共王は軍を率い武城に駐留し，秦国の後援を成した．秦国は晋国に攻め入ったが，晋国は丁度凶作で，反撃できなかった．だが，これは小規模な局地戦にすぎなかった．

冬10月，これは農閑期で兵を集め易く，大規模な戦闘はこの時期に行われることが多い．「諸侯伐鄭，庚午（10月11日）季武子，斉崔杼，宋皇鄖（えん），從荀罃，士匄（かい），門于鄟（せん）門」三人は軍を率いて荀罃，士匄に従って，鄟門に門（もん）す．門すとは門攻めである．城壁のある町を攻める場合，先ず門を攻め，そこから城内に突入するのが一般的な攻撃方法である．城壁は占卜によって区切られ，そこに神意が込められている．それを乗り越えると天罰を受けることになる．晋の上，下軍も東門と北門を攻め，新軍は後方支援をする．この攻撃が終った後，全軍が鄭の汜水のほとりに勢揃いし，鄭側にその威力を見せつけた．これは城攻めの常套手段である．この時，晋侯は諸侯に命じて言った．“武器を整え，食糧を準備し，老幼を帰国させ，傷病兵は虎牢に収容し，罪を犯した者を許し，鄭を包囲させよ．”鄭はこの状況を見て恐れ，講和を申し出た．上軍の将荀偃の意見は次の如くである．“講和を受け入れず，鄭城を包囲して楚軍が救援に来るのを待ち構え，彼等と交戦し打破る．「不然無成」然らずんば成ること無からん．成は講和が成立すること．そうでもしなければ，鄭国と本当の講和など出来っこない（又楚側に付く）．”それに対し中軍の将荀罃の意見は次の如くである．“我々は鄭の講和を受け入れ，その後包囲を解く．それから撤兵しても差し支え無い．楚軍が進攻すれば彼等を疲労させる策をとる．我々は晋の上中下新の４軍を３つに分ける．中軍は予備軍として緊急の場合に備え，上下新の３軍に各侯の精鋭部隊を加え，

来るべき楚軍を迎える．こうすれば我々は rotate して敵に当ることができ疲れることはないが，楚軍は持ち堪えられない．この方が楚と決戦に持ち込むより勝っている．決戦をして戦場に白骨をさらし，一時の気晴しをしても，我々は勝利を得ることは出来ない．更に大きな任務が後に控えている．上の者が充分に作戦を練り，下の者が着実にそれを実行する．これが先王の決めた法である．”諸侯達も戦を欲しなかったので，荀罃の言う通り鄭国の講和を受け入れた．11 月 10 日に結盟した．この時鄭からは鄭伯以下，六卿，その大夫，卿の嫡子が当地に来場した．

晋の士弱は盟書を起草して言った．“本日誓った以上は，もし鄭国が晋国の命にあくまでも従わず，又二心を抱くならば，鄭国はここに書かれた罰を受ける．”鄭国の公子騑は急いで進み出て言った．“天は鄭国に禍を降し，我々を両大国の間に挟んで置かれた．大国は我々に恩恵を与えず，むしろ動乱を起して我々を服させようとしている．我々の鬼神は祭祀を受けられないようにし，民は自分の土地の産物を享する事が出来ない．夫婦は苦しみ痩せ衰え，それを訴える所も無い．この盟会が終った後は，鄭国は，礼と強さを持ち，その上民を守る国に従わず，その国を裏切るなら，同様にこの盟書の罰を受けることになる．”晋国の荀偃が盟書を改めようと言うと，鄭の公孫舎之は言った．“盟書は既に神に宣告したものです．もし盟書を改めることが出来るなら，大国にも背くことが出来ます．”盟会の場が論争の場に変り始めた．荀罃は荀偃に言った．“我々は実際の所，徳を充分に備えているわけではないのに，盟約を相手に強要している．これは礼に悖ることではないか．非礼な事をして何を以て盟主となっていられようか．しばらくは鄭と和睦の盟を結び，軍を退き，徳を修め，軍を休ませ，それから又ここへ来れば，結局は鄭を必ず我が方に引き入れることができる．必ずしも今日でなくてもいいでしょう．我々が不徳なら民は我々を棄てるだろう．それは鄭ばかりではあるまい．もし徳を以て民を休ませ，和げることができれば，遠くの人も親しみをもって来るでしょう．何も鄭国だけに期待することも無いでしょう．”かくて晋は鄭との和睦の後，軍を撤退させた．荀罃は超大国の執政として，実にバランスの取れた指導者であることを示している．

帰国後，晋侯はあまりに戦が続いたため民を休ませようと思い，何をすべきか相談した．魏絳が民に恩恵を施し，労役を免除する事を提案した．国の機関や国君及び全官員の持つ蓄財を拠出させ，それを流通させた．そして貧困の人を無くし，その他，色々なしきたりを簡略化し，倹約をした．「行之期年」之を行うこと期年．期年は一周年，丸一年．「國乃有節」国乃ち節有り，国中に節度が生れた．この後，悼公は楚に対して三度出兵したが，楚はいずれも力を蓄えた晋に太刀打ちできなかった．

晋軍が撤兵した後，当然の事ながら共王の楚軍が鄭を伐ちに来た．執政の子駟はすぐに楚国と講和しようとした．すると子孔達は“我々はたった今，晋国と結盟し，口の血がまだ乾かないうちにこれを破ることは「可乎」可なるか，いいのですか”と言った．子駟は反論した．“我々の盟は本来「唯強是從」ただ強，是れに從う．ただ強国に従うのみ．今楚軍至り，晋は我を救わず．則ち楚強し．盟誓之言に背いているだろうか．強制された盟会や誓言は神霊も認めはしない．「背之可也」之に背いても構わない．”そこで楚と和睦した．この時，楚の荘夫人（共公の母）が亡くなり，共王は鄭国を充分に平定しないまま帰ったと左伝は付記している．

4　偪陽城の戦

魯襄公10年春，魯公，晋侯，宋公，衛公，曹伯，莒子，滕子，薛伯，杞伯，小邾子，斉世子光が祖に会した．この会の目的は呉の寿夢と会することであった．だが実際は違った方向に進んだ．晋の荀偃と士匄が偪陽を伐って，そこを宋の向戌に与えようとした．偪陽は現在の安徽省の西北にある小国で，彼等は簡単にそこを手に入れられると思った．晋と宋の間を良く取持ってくれた向戌を他人の土地で喜ばせようとした．だが荀罃の返事は違っていた．「城小而固，勝之不武，弗勝為笑」城小なれど固く，之に勝てども武勇とは言えず，勝ざれば笑はる．だが二人は「固請」固く請う．そこで4月9日，諸侯軍は之を包囲したが落ちない．色々の人が各自の方法で攻めるが落城しない．その作戦の一つを紹介する．偪陽の人が門を開けた．諸侯の士は門に殺到した．すると吊ってあった門が下げられた．このままでは城内に入った兵士は皆殺しになる．そこに鄒人の紇が門を支えて城内に入った兵士を城外に出した．この大力の紇は孔子の父と言われている．孔子自身も父親譲りの大男であった．本邦の二宮金次郎も大男で有名である．総じて近代以前の社会では，体格の大小は特に身分の低い人物の重要度を計るメルクマールである．但し孔子は衛公から軍事を問われ，それは知らんと断っている．

諸侯の師は久しく偪陽城で戦ったが落ちない．荀偃と士匄は荀罃に申し出た．“雨期が迫っています．その時になると帰れなくなるかも知れません．今のうちに兵を帰しましょう．”荀罃は怒って机を投げ，それが二人の間を飛んだ．“汝等は偪陽城を取り，それを向戌に与えることを事前に決め，その後で私に告げたのだ．余はこれに反対すると，他の命令が乱れるのを恐れて汝等の意見に同意した．汝等は国君に勧めて諸侯の軍を興させ，余のような老兵を引き連れて当地まで来た．汝等は未だ城を落せない．その上，罪を余に被せようとしている．汝等は帰ると「実はあれは荀罃が撤兵を命じたものだ．そうでなければ勝てたはずだ」と言うだろう．余は老いたり，これ以上の責任は取れない．7日以内に勝たねば余は汝等の頭で謝罪させるぞ．”そう言われて両人は5月4日，軍を率いて偪陽を攻め，自ら矢石を冒して戦った．遂に5月8日，偪陽を攻め落した．

晋悼公は偪陽を向戌に下賜し封地にしようとした．だが向戌はそれを断り，宋公に与えるよう要請したので悼公はそれに従った．宋公は晋侯を商（殷）の天子の楽である桑林の舞楽でもてなそうとした．荀罃は天子の音楽だからと辞退したが，荀偃と士匄はそれを受けた．天子の礼楽を見ることができるのは諸侯の中で宋と魯だけである．（宋は商の後，魯は周公の後）折角だからみせて頂こう．宴会が終り悼公は帰路に着いたが，途中で病になった．卜者に占わせると「桑林」之神が現れた．荀偃と士匄は急いで宋に戻り，桑林の社に祈りを捧げようとした．荀罃はそれを許さず言った．“私は断ったのに宋人が礼楽を行ったのだ．「猶有鬼神　於彼加之」なお鬼神有らば，彼に加えよ．もし鬼神の祟りが有るなら，あちらさん（宋）に祟ったらいい．”そのうち晋侯の病は治った．荀罃の合理性，面目躍如たるものが伺える．2500年前の言とは思えない．

Ⅳ　鄭の決断

鄭ではクーデターが起り（前 563），鄭を支配していた子駟，子国，子耳が殺された．これを鎮圧したのは子国の子，子産達である．クーデターの時その場に居合せなかった卿の子孔が執政となった．それによって以前のレジュームが崩壊し，新たな政権が発足した．その 1 年後の襄公 11 年（前 562），鄭人は晋楚両国からの圧迫から解放されるため，より強力と判断した晋側に立つことに決めた．そしてそのためにはどうすれば良いかを相談した．

子展は次の様な提案をした．先ず，鄭が宋とトラブルを起せば諸侯は必ず至らん，吾之に従いて盟す．楚師至らば吾又之に従う，則ち晋怒ること甚し．かくて晋がしばしば鄭に来るようになれば，楚はそれを防ぎきれないだろう．そうなって初めて我々は固く晋と結びつくことが出来る．これを聞いて大夫達は大いに悦び，国境地帯の役人に宋国を挑発する様に命じた．宋の向戌は鄭を侵し多数の捕虜を得た．子展は言う．“「師而伐宋可矣」師して宋を伐つは可なり，軍を出して宋を伐つのが可能になった．もし我々が宋を伐てば，諸侯之師が我々を伐つはずである．吾は直ちに降参の命令を受け入れ，それを楚に報告する．すると楚師至る，吾又之と盟す．而して，晋軍には多大の礼物を送っておけば大丈夫であろう．”鄭の子展は実際にこの計画を実行し宋を侵した．遂にこの一年で鄭の帰趨が判明する．4 月，諸侯は鄭を伐った．4 月 19 日，斉の太子光，宋向戌が先ず鄭に至り東門を門す．その日の夕方晋の荀罃が西郊に至り，それから元の許の地を侵す．衛の孫林父は鄭の北鄙を侵す．6 月，鄭の国都を包囲し，南門で勢揃いをし威を見せる．鄭人は懼れ，和睦し，7 月に亳（はく）で同盟を結んだ．この時，予定通り多大の贈物が鄭から晋に送られたであろう．

楚子囊（どう）「乞旅于秦」楚子囊旅を秦に乞う．旅は旅団 brigade の意で，古代は 500 名である．だが，この場合は一個旅団を要請したのではなく，援軍を秦に求めた程度の意味であろう．師は師団 division であるが，一般に‘軍’を意味する．又師旅とも言う．秦の右大夫詹（せん）が師を帥（ひき）いて楚の共公に従い将に以て鄭を伐たんとす．鄭伯之を逆（むか）う．即ち降伏し迎えた．7 月 27 日，楚秦連合軍は宋を伐った．

9 月，晋側の諸侯は全軍を挙げて又も鄭を伐つ．腹を決めた鄭は良霄（しょう）と太宰石㚟（ちゃく）を楚に行かせ，鄭は将に晋に服せんとす，と楚に告げさせた．更に“我が君は国家の存続を願い，もはや楚の君主をお慕いし，付いているわけにはいきません．楚君が玉帛を以て晋国を宥めて下されば最高ですが，そうでなければ武力で晋を脅して下さい．これが我が国君の願いです．”と告げた．これを聞いて「楚人執鄭行人良霄」楚人鄭の行人（使者）良霄を執う，楚人はこの使者二人を捕えた．‘行人’とは使者でこれを楚が捕えたことを非難しているのである．諸侯は鄭の東門で勢揃して武威を見せつけた．鄭はこれを見て講和を行った．

9 月 26 日，晋は趙武が鄭国の国都に入り鄭伯と盟した．続いて鄭の子展が晋の軍中で晋侯と盟した．12 月 1 日，蕭（せう）魚で双方が会見した．晋国は鄭の捕虜を釈放し，皆を丁寧に扱い帰した．各地に出した斥侯も呼び戻し，略奪を禁じた．略奪行為は人類が戦争を始めて以来のもので，兵士に然るべき給料を

払わなければ，略奪は兵士達の給料に当ることになる．日本でも武士道が高く評価されているが，一方「切取り強盗武士の習い」が随所に見られた．

鄭が晋に帰属することになり，その際，莫大な贈物が晋の悼公に送られた．楽師3人，攻車，守車各15輌，これには各々甲冑武具類が整備されている．その他の兵車も含めて全部で100輌．楽器は歌鐘二列とそれに配される鎛鐘と磬の楽器及び女楽16人が贈られた．悼公は楽の半分を魏絳に下賜して言った．“あなたは私に教えて諸々の戎狄と講和させ，その結果，中原諸侯国との関係も良好になった．8年のうち，諸侯を九合すること楽の和の如し，何の不協和も無かった．「請與子楽之」請う，子と共に之を楽しまん．さああなたとこの音楽を楽しもう．”魏絳は辞して言う．“私の力なぞ何ほどのものが有りましょうか．これらは全て君主の御威光や卿達の努力の結果です．”だが公言う．“あなたの教えが無ければ，戎狄をどうして安撫することが出来たでしょうか．又黄河を渡って鄭を征することが出来たでしょうか．国が功績のある臣に賞を与えるのは当然である．あなたはこれを受けなさい．”そこで魏絳は之を受けた．だが，実際はこの戦を終えた最大の功労者は言うまでもなく荀罃であった．

長い間続いた晋楚による鄭争奪戦もここに終止符が打たれた．晋楚は勿論，中原諸国家も皆，何はともあれほっとしたことであろう．翌年前561年，左伝襄公12年には，経文にも左伝にも大きな事件は何も記されていない．一年の内に大軍が3度鄭を襲った前年とは比較にならない．

左伝襄公13年には「荀罃，士魴卒」とある．荀罃が邲の戦（前597）で捕虜になってから死亡の襄公13年（前560）まで約40年．彼が邲の戦の時，10代の後半だったと仮定すると，死亡したには50才位と考えられる．今から2500年前，夏目漱石と同じ位生きたとすると，相当長寿だったと言える．晋の悼公は緜（めん）上に軍を勢揃させ，新たな軍の指揮官を任命し，荀偃を中軍の将とした．秋には楚の共王が亡くなった．共王は在位31年であるから約40年生きていたことになる．そして悼公もその2年後に亡くなる．在位16年である．そうすると30才で死亡したことになる．だが，その前には対秦戦という大仕事が待っている．

参考文献

本篇の公羊穀梁傳の歴史的背景は‘春秋’及びその三伝と史記に基づいて書いたものである．以下の参考文献以外にも多数の歴史書，古典訳書を参照したが，ここには挙げていない．

1．春秋史　顧徳融　朱順龍　上海人民出版社　2001 年
春秋期の政治史以外に社会経済史，地方組織，政治，軍事制度，社会構成，思想，芸術，科学技術，礼儀風俗等，春秋時代全般を広くカバーし，この時代を見るには現在の所，必見の書と思われる．
2．春秋战国的社会変迁（上下）晁福林　商務印書館　2011 年
3．左傳国策研究　郭丹　人民文学出版社　2004 年
4．春秋婚姻礼俗と社会倫理　陳筱芳　巴蜀出版　2000 年
5．《春秋》経傳研究　趙生群　上海古籍出版社　2000 年
6．《春秋》考論　姕曼波　江蘇古籍出版社　2002 年
7．国語集解　徐元誥　中華書局　2006 年
8．An Outline History of China Bai Shouyi Foreign Language Press Beijing (2005)

成公 17 年―襄公３年までの通釈
凡　例

一．本通釋は底本として『春秋三傳』（朱子小學及四書五經讀本　世界書局・臺灣）を用いた．
二．経文の頭の数字は公の順番，年，その年の経文の順番を表わす．公の順番：隠公１，桓公２…哀公 12
例）５／10・５　僖公／10 年・５番目の経文
三．譯文中の「　」は原文引用と譯文引用，〔　〕は譯者による意味の補い，（　）は，語句の簡單な説明，“　”は會話文である．
四．通釋は，以下を参照した．

○王維堤・唐書文『春秋公羊傳譯注』（上海古籍出版社，1997 年）
○薛安勤『春秋穀梁傳今註今譯』（台湾商務印書館，1994 年）
○承載『春秋穀梁傳譯註』（上海古籍出版社，1999 年）
○李宗侗注釋『春秋公羊傳今註今譯』（台湾商務印書館，1972 年）
○傳隷樸『春秋三傳比義』（上・中・下）（中国友誼出版公司，1984 年，北京）
○玉寧主編『評析白話公羊傳・穀梁傳』（北京広播学院出版社，1993 年）
○劉尚慈『春秋公羊傳譯註』（上・下）（中華書局，2010 年）
以上の他，『何氏解詁』等，伝統的な解説書や国内刊行の三傳関係の書を利用させていただいた．

8／17－6　**九月辛丑用郊**

【公羊傳】用者何。用者不宜用也。九月非所用郊也。然則郊曷用。郊用正月上辛。或曰用。然後郊。

【公羊傳譯】用とはどういう意味か．用とは挙行するという意味だが，ここで，用と書かれているが，挙行してはならないことを表している。９月は郊祭を行う時ではない．そうならば，郊祭はいつ行うべきか。郊祭は正月の上辛の日に行うものである。あるいは，后稷を祭った後で郊祭を行う．

【穀梁傳】夏之始。可以承春。以秋之末。承春之始。蓋不可矣。九月用郊。用者不宜用也。宮室不設。不可以祭。衣服不備。不可以祭。車馬器械不備。不可以祭。有司一人。不備其職。不可以祭。祭者。薦其時也。薦其敬也。薦其美也。非享味也。

【穀梁傳譯】夏の初めが春に続いているのは可能である．だが，秋の終わり，即ち９月は春の初めに続くことは，おそらく不可能であろう．経文では９月に郊祭を行っているが，この行ったことは本来行ってはならないことである．宮室を設けなければ祭は行えない．衣服を整えなければ祭は行えない．車馬，器具を整えなければ祭を行えない．たとい，ひとりの役人でもその職務をきちんと果たさなければ祭は行えない．祭は神霊に対してその季節の一番旬なものを差し上げる．これは人々の敬虔な心を差し上げている．そのおいしいものを差し上げるということは，美味を神様に味わってもらうことだけではない．

8／17－7　**晉侯使荀罃來乞師**

8／17－8　**冬公會單子晉侯宋公衛侯曹伯齊人邾人伐鄭**

【穀梁傳】言公不背柯陵之盟也。

【穀梁傳譯】この経文では魯の成公は，柯陵の盟約に従っていることを表している．

8／17－9　**十有一月公至自伐鄭**

8／17－10　**壬申公孫嬰齊卒于貍脤**

【公羊傳】非此月日也。曷爲以此月日卒之。待君命。然後卒大夫。曷爲待君命。然後卒大夫。前此者。嬰齊走之晉。公會晉侯將執公。嬰齊爲公請。公許之反爲大夫。歸至于貍軫而卒。無君命。不敢卒大夫。公至。曰。吾固許之。反爲大夫。然後卒之。

【公羊傳譯】この月日は，公孫嬰斉は，この日に死んだのではない．それならばなぜこの日に死んだと経文に記してあるのか．国君の命令を待って，その後に，はじめて大夫が死んだことを記するのである．（国君が命じたので大夫になれる．）どうして，君命を待ってしかる後に大夫が死ぬことになるのか．これ以前に，嬰斉は晉国へ逃げていた．成公は，晉侯に会見し，晉侯は成公を捕らえようとした．嬰斉は成公のために，捕らえないようにと願った．晉侯はこれを許し，成公は，彼が国へ帰った後に，大夫に任命すると言ってそれに応えた．帰国の途中，貍軫で死んだ．君命がなければ，あえて大夫が死んだことを書かない．成公が帰国して言った，私はもともと帰国したら，彼を大夫にしてやることを彼に許した．それ故，君命を待って，しかる後に，彼の死を記したのである．

【穀梁傳】十一月。無壬申。壬申乃十月也。致公。而後録。臣子之義也。其地。未踰竟也。

【穀梁傳譯】11 月には，壬申の日はなく，それは 10 月にある．成公が鄭を討ってから帰国したことを記し，その後に，大夫が死んだことを記すのは，君臣の義としてはとうぜんである．嬰斉の死亡した地点が記されているのは，それが魯国内にあったからである．

8／17－11　**十有二月丁巳朔日有食之**

8／17－12　**邾子貜且卒**

8／17－13　**晉殺其大夫郤錡郤犨郤至**

【穀梁傳】自禍於是始矣。

【穀梁傳譯】晉国の災いはこのときより始まった．

8／17－14　**楚人滅舒庸**

8／18－ 1　**十有八年春王正月晉殺其大夫胥童**

8／18－2　**庚申晉弑其君州蒲**

【穀梁傳】稱國以弑其君。君惡甚矣。

【穀梁傳譯】経文に国の名前で，その国君を殺していると書かれているのは，この国君が極悪であることを表している．

8／18－3　**齊殺其大夫國佐**

8／18－4　**公如晉**

8／18－5　**夏楚子鄭伯伐宋宋魚石復入于彭城**

8／18－6　**公至自晉**

8／18－7　**晉侯使士匄來聘**

8／18－8　**秋杞伯來朝**

8／18－9　**八月邾子來朝**

8／18－10　**築鹿囿**

【公羊傳】何以書。譏。何譏爾。有囿矣。又爲也。

【公羊傳譯】どうしてこのことを書いたか．非難しているのである．何を非難しているのか．既に園（狩場）があるのにまたこれを作ったことを非難したのである．

【穀梁傳】築不志。此其志。何也。山林藪澤之利。所以與民共也。虞之。非正也。

【穀梁傳譯】本来，狩場を築くようなことは経文には書かないのに，ここでは狩場を築いたことが書いてある．それは何故か．山林湖沢の産物は，民とともに利用するものである．この土地を区切って狩場にし，ここに管理人を置くことは，治国の正道ではない．

8／18－11　**已丑公薨于路寢**

【穀梁傳】路寢。正也。男子不絶婦人之手。以齊終也。

【穀梁傳譯】諸侯が路寝で死ぬのは，礼に合っている．男子は婦人の手の中で死なずに，身も心も清くして，世を去らねばならない．

8／18－12　**冬楚人鄭人侵宋**

8／18－13　**晉侯使士魴來乞師**

8／18－14　**十有二月仲孫蔑會晉侯宋公衛侯邾子齊崔杼同盟于虛朾**

8／18－15　**丁未葬我君成公**

9／1－1　**襄公元年春王正月公即位**

【穀梁傳】繼正即位。正也。

【穀梁傳譯】襄公は側室の子であるが，亡くなった成公の正夫人には子どもがなかった．それゆえ，襄公が位を継いだのは正道である．

9／1－2　**仲孫蔑會晉欒黶宋華元衛甯殖曹人莒人邾人滕人薛人圍宋彭城**

【公羊傳】宋華元曷爲與諸侯圍宋彭城。爲宋誅也。其爲宋誅奈何。魚石走之楚。楚爲之伐宋。取彭城以封魚石。魚石之罪奈何。以入是爲罪也。楚已取之矣。曷爲繫之宋。不與諸侯專封也。

【公羊傳譯】宋の華元は何故諸侯と一緒に宋の彭城を包囲したのか．宋のために悪を誅したのである．それは宋のために悪を誅したといっているが具体的にはどのようなことか．魚石が楚に亡命したとき，楚は彼のために宋を攻めて彭城を取り，それを魚石に与えた．魚石の罪とは一体なにか．魚石が彭城に入ったことが罪である．楚は既に彭城を占領しているのに，どうしてこの地を宋のものと経文に書いているのか．これは，諸侯が勝手に土地を与えることに賛成していないことを表している．

【穀梁傳】繫彭城于宋者。不與魚石。正也。

【穀梁傳譯】彭城を宋国の下に書き，彭城が宋国の邑であることを表したのは，ここを宋から楚に亡命した魚石たちに与えないという意図を表している．これは，正道に合っている．

9／1－3　**夏晉韓厥帥師伐鄭仲孫蔑會齊崔杼曹人邾人杞人次于鄫**

9／1－4　**秋楚公子壬夫帥師侵宋**

9／1－5　**九月辛酉天王崩**

9／1－6　**邾子來朝**

9／1－7　**冬衞侯使公孫剽來聘晉侯使荀罃來聘**

9／2－1　**二年春王正月葬簡王**

9／2－2　**鄭師伐宋**

9／2－3　**夏五月庚寅夫人姜氏薨**

9／2－4　**六月庚辰鄭伯睔卒**

9／2－5　**晉師宋師衞甯殖侵鄭**

【穀梁傳】其曰衞甯殖。如是而稱于前事也。

【穀梁傳譯】経文で，衛の寧殖とこのように書いてあるのは，春秋の成公２年の時に，衛侯が死にそのときに鄭国が衛国に攻め込んで来た．それに対する報復であることを示している．

9／2－6　**秋七月仲孫蔑會晉荀罃宋華元衞孫林父曹人邾人于戚**

9／2－7　**己丑葬我小君齊姜**

【公羊傳】齊姜者何。齊姜與繆姜則未知其爲宣夫人與。成夫人與。

【公羊傳譯】斉姜とは誰か．斉姜と繆姜の両人のうち，いずれが宣公の夫人でいずれが成公の夫人か分からない．

9／2－8　**叔孫豹如宋**

9／2－9　**冬仲孫蔑會晉荀罃齊崔杼宋華元衞孫林父曹人邾人滕人薛人小邾人于戚遂城虎牢**

【公羊傳】虎牢者何。鄭之邑也。其言城之何。取之也。取之則曷爲不言取之。爲中國諱也。曷爲爲中國諱。諱伐喪也。曷爲不繫乎鄭。爲中國諱也。大夫無遂事。此其言遂何。歸惡乎大夫也。

【公羊傳譯】虎牢とはどこか．鄭国の邑である．経文に城壁を築くとあるが，これはどういう意味か．それは，当地を占領したことを意味する．占領したならば，どうして占領したと言わないのか．それは，中原諸国のために，隠したのである．どうして中原諸国のために隠したのか．鄭の国君が死に，その喪中に鄭を攻めたからである．どうして，虎牢が鄭の土地だと言わないのか．これも，中原諸国のために隠したのである．大夫は本来勝手にことをなしてはならない．ここで，「遂」（勝手な行い）と言っているのはなぜか．罪を大夫のせいにしようとしているのである．

【穀梁傳】若言中國焉。内鄭也。

【穀梁傳譯】ここでは鄭国の虎牢とは言っていない．鄭国は晉に服従したので本来，鄭の土地であっても，あたかも，晉の土地であるかのように記してある．

9／2－10　**楚殺其大夫公子申**

9／3－1　**三年春楚公子嬰齊帥師伐吳**

9／3－2　**公如晉**

9／3－3　**夏四月壬戌公及晉侯盟于長樗**

9／3－4　**公至自晉**

9／3－5　**六月公會單子晉侯宋公衞侯鄭伯莒子邾子齊世子光已未同盟于雞澤**

【穀梁傳】同者有同也。同外楚也。

【穀梁傳譯】経文中に同と書いてあるのは，各国が共通の目的をもっていることを表している．即ちここでは楚の侵攻を共同して阻止することである．

9／3－6　**陳侯使袁僑如會**

【公羊傳】其言如會何後會也。

【公羊傳譯】ここで，「如会」と書いてあるのは，会が終わったあと到着したことを意味している．

【穀梁傳】如會。外乎會也。於會受命也。

【穀梁傳譯】経文に「如会」と書いてあるが，実際は，袁僑が，盟会が終わったあとに到着したので，既に出来上がった盟約を受け入れたのである．

9／3－7　**戊寅叔孫豹及諸侯之大夫及陳袁僑盟**

【公羊傳】曷爲殊及陳袁僑。爲其與袁僑盟也。

【公羊傳譯】特別に陳国の袁僑と経文に書いてあるのは，どうしてか．それは，諸侯の大夫がまた別に袁僑と盟したからである．

【穀梁傳】及。以及。與之也。諸侯以爲可與。則與之。不可與。則釋之。諸侯盟。又大夫相與私盟。是大夫張也。故雞澤之會。諸侯始失正矣。大夫執國權。曰袁僑。異之也。

【穀梁傳譯】及と及の二つの字を経文で用いているが，これは，両方とも with（と）の

意味である．諸侯が誰かと結盟してもよいと思ったならば，その人と結盟する．誰かと結盟してはならないと思えば，それはやめる．諸侯が結盟すると，その下の大夫たちも相互に私的に結盟する．このようにしていると，大夫たちの権限は拡大する．故に，６月の鶏沢（けいたく）の会で諸侯は政治権力を失い始めたのである．大夫は国家の大権を掌握した．経文中でわざわざ袁僑と言っているのは，諸侯の大夫とは同じではないことを表している．